スイスでヒツジ•ヤギについて学ぶ

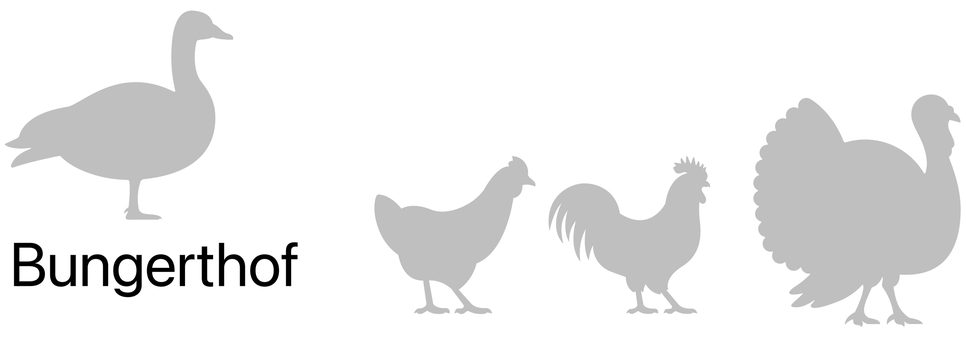
岩手大学農学部共同獣医学科3年
小澤茂々花

Februar, März

Berg am Irchel

Zürich HB（Zürich 中央駅）から電車とバスを乗り継いで約1時間でつく小さな村。
アルプスは見えず、草木に覆われた丘と山が広がっている。また、ブドウ畑が多く見られる。
何十年か前は家が一軒しかなく、そこにみんな住んでいたそう → 私が滞在した Bungerthof
レストランが１つ、スーパーマーケットはなく、バス停が1カ所。
歩いて約10分の隣りの村に行けばパン屋とスーパーがある。

すてきなリビング。
農場に関わるたくさんの人が集まる。



Bungerthof

飼育動物
雌羊14頭と雄羊1頭、生まれた子羊10頭、鶏、七面鳥、ガチョウ
羊:母羊と子羊は小屋の中で飼育し、朝と昼に２時間くらいずつ放牧。他の羊は小屋付きの放牧場。
鶏と七面鳥:小屋と囲い付きの外を自由に行き来できる。小屋の中の小さな鳥小屋内で卵を産む。
ガチョウ:囲い付き、池付きの草地。
（私の滞在期間は鳥インフルエンザ流行により上も網に覆われたスペースで飼育。）

ショップ
直接経営する無人販売ショップ１つ。他の１つの店に商品を置いて販売。

子羊は、お互いつつき合って追いかけ合ったり、飛び跳ねて遊ぶ。
農場の人はヒツジに声をかけ、なでたりして大切に世話をするため、ヒツジたちはみな基本的に人懐こく、特に子羊は人に興味津々で近寄ってきては走って逃げたり、エネルギーがほんとうにすごい。
兄弟より小さい子羊がいたので、哺乳瓶で1週間ほど定期的にミルクをあげた。気づけば大きくなって、母羊からミルクをうまく飲んでいるのを見る時にはとてもうれしかった。

土日 には子ども連れの家族や散歩中の人がヒツジを見に立ち寄ることも多い。農場の人は質問に答えながら仕事をする。
多くの人が農場に関心を持っている、また子どもに動物の様子を見せたいと思っていることが感じられた。

スイスのヒツジ・ヤギ事情
　スイスでも、ヒツジ・ヤギのミルクを好んで飲む人は少ない。しかし、農場内ではヒツジミルクが主流。
ヒツジミルクは分解されやすいと言われているが、ウシミルクではお腹がぐるぐるする私も、実際にヒツジミルクでは問題ないことがわかった。
　農場でとれたミルクは、私の滞在期間は子羊がいて人間用のミルクは子羊が死んでしまった/キツネにさらわれた等のヒツジのミルクのみなので、農場内で消費する、またはチーズ用に冷凍。子羊が離乳したくさんミルクがとれたらチーズを作る。
チーズはヒツジ、ヤギともにスイスで一般的に食べられているそうで、Bungerthof でもショップで販売する。

獣医師がやっていたこと
　スイスの産業動物獣医師はウシ、ウマが中心だがヒツジ、ヤギも診るそう。
歩き方がおかしいヒツジの診察では体温測定（平熱37.5-39.5°Cくらい）をしたあと、削蹄、蹄の隙間に入っていた石を除去。
メタカム（NSAIDS、痛み止め）を肩の部分に筋肉注射した。筋肉注射は肩の部分に行うことが多い。
2、３週間あまり動かさないように指示して終了。あまり動かさない、とはいつものように放牧を行わない、ということ。
　また眼瞼内反症（Entropien）の子羊の眼瞼を縫合糸で留めた。生まれつきのもので、ヒツジでたまに見られるそうだが、処置をすれば自然に治る。

スイスの卵事情
　スイスには卵のサブスクリプションサービスのようなものがある。
毎月お金を払い、農場から卵が届く仕組み。どんな農場から来た卵かがわかるのでいいそう。

アルプス
　Berg am Irchel にいると景色は日本に似ているが、
イタリアの Tirano まで続くこの列車から見える氷河のあるアルプスの景色は全然違う！
この区間も草のある地域には、ウマの牧場とヒツジの放牧場が１つ見えた。